

後藤健さんを偲ぶ

近藤 英夫*

Obituary for Doctor Takeshi Gotoh (1950–2020)

Hideo Kondo

後藤健さんが2020年1月11日に逝去された（享年69歳）。後藤さんは、山形県出身で、東京教育大学を卒業、同大学大学院修士課程を修了後、筑波大学大学院博士課程中退。大学院を終えた後は、古代オリエント博物館研究員となり、その後、東京国立博物館東洋課に勤務された。同館では、西アジア・エジプト室室長、上席研究員を勤め、長く西アジア研究の第一線で活躍された。日本西アジア考古学会の2008・2009年度の会長である。

東博を2016年に定年退職された後は、都内の大学の非常勤講師などを勤める一方、湾岸地域の考古学調査を精力的に続けられていた。しかし、昨年の初夏に体調を崩され、回復かなわず、早いお別れになってしまった。

後藤さんは、1975年にイランのシャールード近郊のバスターム村で、タペ・サンギ・チャハマック（Tappeh Sang-e Chakhmaq）遺跡の調査に従事されている。この遺跡が、彼の西アジアとの関わりの始まりである。筆者と後藤さんとの出会いも、この時である。筆者はこの遺跡を訪れ、調査を数日間見学させていただいた。その時に後藤さんとお会いした。闊達な人というのがその時の印象である。以来、後藤さんとの付き合いは45年を数える。

後藤さんはその後、古代オリエント博物館研究員となり、シリアのアレッポ市郊外のテル・アリ・アル＝ハッジ（Tell Ali al-Hajj）遺跡をはじめとするルメイラ・ミシオルフェ地区の調査やパルミラ美術史調査を経験している。また、東博に勤められてからの80年代には、地中海東岸地域からインド・パキスタンまで、広く西・南アジアを歩かれている。こうした体験が、この後の後藤さんの学問形成の下地となっている。

90年代に入り、カタールのウナム・アル＝マー（Umm al-Māʾ）墳墓群、バハレーンのアイン・ウナム・エッ＝スジュール（ʿAin Umm es-Sujur）遺跡の調査を行い、「湾岸考古学」の地歩を固める。ちなみに、アイン・ウナム・エッ＝スジュール遺跡の調査には筆者も参加しており、夜を徹してメソポタミア＝インダス交易について語り合ったことが懐かしい。

後藤さんと筆者とは、90年代にはバハレーンでの調査以外にも、国内で二つの大きな作業を共有した。

一つは、日本西アジア考古学会（1996年度）の創設にかかわったことである。二つ目は、「NHK・四大文明展」にかかわったことである。

日本西アジア考古学会は、海外調査や留学を体験した当時（90年代）の若手研究者がおこしたムーブメントの結果、出来上がった学会である。後藤さんも、その創設にかかわる重要なメンバーであった。1996年に学会が出来た後は、後藤さんは、渉外や広報の担当を務めている。調査で培われた、卓抜な交渉力が評価されていることである。

1999年には学会内の「文化財保護問題特別委員会」委員として活動した。このときは、アフガニスタンにおける文化財海外流出を防ぐことと、レバノンの復興



アイン・ウナム・エッ＝スジュール遺跡にて（1994年）

支援とが、この特別委員会の課題であった。後藤さんと筆者は、主にアフガニスタンの文化財問題を担当した。ちなみに、レバノンを担当したのは、川西宏幸さんや松本健さんらである。

今日、日本西アジア考古学会は、「国際協力」・「戦乱と文化財問題」に敏感な学会として知られているが、後藤さんらは、その先駆的役割を果たしたと、筆者は思っている。彼が中心になってまとめた『アフガニスタンの文化財問題を考える』（日本西アジア考古学会編 1999）は、もっと評価されていると考える。

二つ目にあげた「NHK・四大文明展」は、後藤さんなくしては成り立たなかったイベントである。

NHK がミレニアを記念して、四つの博物館で個別の文明の展覧会を行う、さらに番組や図録を作るという、壮大な企画である。その企画で、筆者はインダス文明を担当した。エジプト文明は吉村作治さん、メソポタミア文明は松本健さん、中国文明は鶴間和幸さんがそれぞれ担当し、そして取りまとめが、東博西アジア・エジプト室室長の後藤さんという布陣であった。博学の彼ぬきには成り立たなかった企画であり、その期待に応え、彼はまとめ役をみごとにつとめて成功させた。彼のコーディネーターとしての能力は、もっと評価されてもいいと筆者は思っている。

2000 年の NHK のイベントは、西・南アジア各地

が比較的平穏で、相互の行き来がまだ自由であった時期に企画されたものであり、図録の作成や、現地ロケに基づく映像記録など、今日に残る仕事ができたと考えている。いい時に、彼にめぐりあえたと感謝している。

2000 年以降、後藤さんとは一緒に仕事をする機会は減ったが、筆者にとっては西・南アジアの歴史観を共有できるいい仲間であり続けた。彼の学位論文『アラビア湾岸における古代文明の興亡』（後藤 2011）の主査をつとめたことも、良い思い出である。

後藤さんが自らの豊富な西・南アジアの体験をどうまとめるかは、長年にわたり同じ地域を扱ってきた筆者にとって、最大の関心事であった。好著『メソポタミアとインダスのあいだ』（後藤 2015）は、その第一弾であった。続編を期待していたが、叶わぬこととなった。ご冥福を。

参考文献

後藤 健 2011『アラビア湾岸における古代文明の興亡』東海大学博士学位論文 東海大学大学院文学研究科。

後藤 健 2015『メソポタミアとインダスのあいだ：知られざる海洋の古代文明』筑摩選書 筑摩書房。

日本西アジア考古学会（編）1999『アフガニスタンの文化財問題を考える』西アジア考古学会叢書 1 日本西アジア考古学会。



バハレーンの調査宿舎にて



バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘現場にて